

論文の和文要旨

論文題目

アイルランド語 ‘be done’ 構文について

氏名

山田怜央

現代アイルランド語(インド=ヨーロッパ語族ケルト語派ゴイデリック諸語)は VSO 語順を持ち、通常、動詞直後の位置に来る文法的主語は動作主を、それよりも後に来る文法的目的語は被動作主を表す。

この通常構文(本稿では「単純時制構文(*simple tense construction*)」と呼称する)とは別に、本稿で‘be done’構文と呼称する構文が存在する。これは自動詞(助動詞) *bi* ‘be’ と動形容詞(およそその他西欧諸語の過去分詞に相当)から構成される。自動詞の場合、文法的主語の位置に立つ項は単純時制構文と同様に動作主であるが(英語で表せば ‘Someone is gone’)、他動詞の場合、その位置には被動作主が現れ、動作主は前置詞句で示される(‘Something is done by someone’)。この他動詞における統語的振る舞いは典型的な受動構文と類似しており、実際に Ó Siadhail (1989) など、多くの先行研究ではそのように記述されている。

しかし上述のように、自動詞からも作ることが可能で、その場合には単純時制構文の主語がそのまま文法的主語として残るなど、受動構文とは明らかに異なる点も見受けられる。Orr (1989) などはこの点を反映して、当該構文を能格的なものとして分析している。この場合、前置詞 *ag* ‘at’ が能格の標識という分析になる。

アイルランド語で「受動」と呼ばれているものは当該構文以外にも存在し、特に「非人称受動」などと呼称されるものが広く用いられる。この形式は *bris* ‘壊す’ なら *bristear* のように、動詞の特別な活用形によって示され、不特定多数の実体が動作主となるような場合に用いられる(この点でフランス語 *on* やドイツ語 *man* を用いた非人称文に似る)が、時に受動的な意味を帯びることがあるため、このように呼ばれている。しかしこの形式もまた、自動詞からも作れること、‘be done’ 構文と異なり動作主を取れないことなどから、典型的な受動とは言い難い。

アイルランド語の‘be done’ 構文についての分析はいまだ一貫しておらず、また意味についての研究も不十分であると考えられる。そこで本稿では、以下 2 つの調査をおこない、当該構文を記述するにより相応しいのは「能格的な構文」の方であるという点を立証し、その意味用法について、「結果性」という言葉を用いて説明する。

- ・調査 A：英愛対訳による調査
- ・調査 B：アイルランド語コーパスによる調査

それぞれの調査について、以下に簡潔に述べる。

調査 A では、英語原作小説 Rowling, J.K. (1997), *Harry Potter and the Philosopher's Stone* 及びそのアイルランド語訳版 Nic Mhaoláin, Máire (2004) (tr.), *Harry Potter agus an Órchloch* 並びにアイルランド語原作小説 Ó Cadhain, Máirtín (1949) *Cré na Cille* 及びその英語訳版 Tittley, Alan (2016) (tr.) *The Dirty Dust: Cré na Cille* を用いて調査をおこなった。

その結果として、アイルランド語の‘be done’構文を基準に見た場合、当該構文が英語の受動構文に対応していたものは 30%程度であったが、そのほとんどは前置詞句で表される動作主を含まないものであった(‘Something is done’)。それに対して、アイルランド語の当該構文が前置詞句を伴っている場合(‘Something is done by someone’)、英語の受動構文に対応するものは僅かであり、むしろ完了構文に対応していた。つまり英愛翻訳の際に、文法的な主語と目的語とが入れ替えられていたということであり(アイルランド語の構文を‘Something is done by someone’のように表せば、対応する英語の構文は‘Someone has done something’のようであった)、Orr (1989)らの能格としての分析を支持する形となった。

それとは逆に英語の受動構文を基準に見た場合、上述のように、アイルランド語の‘be done’構文と対応する例はある程度得られたが、それと同程度に、英語の受動構文がアイルランド語の非人称構文に対応している例も見られた。あまり結果性を含意しないような文脈において、いわば一回性のある出来事がこちらの対応を示す傾向にあるようだ。

最後に英語の完了構文を基準に見た場合、これがアイルランド語の‘be done’構文に対応するものについては上で述べた通りであるが、全体の約半数ほどがアイルランド語の単純時制構文に対応していた。つまり、英語で完了構文が用いられるような文脈であっても、アイルランド語において‘be done’構文が用いられるとは限らない。

調査 B では、アイルランド語電子コーパス *Nua-Chorpas na hÉireann* (The New Corpus of Ireland)を用いた。まず語彙頻度より動詞を 100 個選び出し、それぞれの動詞が単純時制構文で用いられたものと、‘be done’構文で用いられたものとを抽出した。その結果として、*sín*「伸ばす」、*scríobh*「書く」など、結果性を含意するような動詞は‘be done’構文に用いられやすく、*téigh*「行く」や *síl*「思う」などの移動や思考を表す動詞は当該構文に用いられにくい、という結果になった(ただし移動動詞のうち *imigh*「去る」という動詞はかなり高頻度で当該構文に用いられる)。さらに知覚動詞について見てみ

ると、‘see’や‘hear’にあたる動詞の方が、‘look’や‘listen’にあたる動詞よりも当該構文の適用率が高かった。これらの結果は Tsunoda (1985)の提示する二項述語階層と関係していると考えられる。つまり、適用率の高かった動詞は、このスケールにおいてより上位に位置するようなものであり、本稿の言葉で説明すれば、結果性が高い、ということになる。

また、それぞれの動詞の統語的特徴からの分析もおこなった。特に重要な点を挙げると、まず被動作主志向動詞(patientive verb : *sin* 「伸ばす」や *dún* 「閉じる」など、自動詞用法の単一項が他動詞用法の被動作主に対応するもの)は比較的‘be done’構文に用いられやすく、逆に動作主志向動詞(agentive verb : *ith* 「食べる」や *léigh* 「読む」など、自動詞用法の単一項が他動詞用法の動作主に対応するもの)は当該構文に用いられにくい、というものである。これにはそれぞれの動詞が持つ結果性が当然関わっていると考えられるが、それに加えて前者では自動詞用法(‘Something closes’)と他動詞用法(‘Someone closes something’)の両方から‘be done’構文が作れるのに対し、後者では他動詞用法(‘Someone eats something’)からのみ当該構文を作ることができ、自動詞用法(‘Someone eats’)からは作ることができない、ということが考えられる。つまり、当該の事象に被動作主が現れていない場合、基本的に‘be done’構文を作ることができない、ということである。

最後に、脱他動詞化構文についての類型論的記述である Givón (1994)が提示する相対的話題性という概念に基づき、アイルランド語の‘be done’構文における動作主人称(前置詞句)と単純時制構文における動作主人称(文法的主語)、アイルランド語の当該構文における動作主人称(前置詞句)とフランス語の受動構文における動作主人称(前置詞句)とを比較する。Givón (1994)によれば、能動文における動作主の話題性は被動作主のそれより高く、逆に受動文における動作主の話題性は被動作主のそれより遙かに低いという。つまり、アイルランド語の‘be done’構文が態の交替によって特徴付けられるものであれば、そこに何らかの話題性の変化が見られるはずである。しかし調査の結果、アイルランド語の当該構文と単純時制構文の間に話題性の差異は見られず、‘be done’構文であっても1・2人称の動作主が現れた。それに対し、フランス語の受動構文における動作主はほぼ3人称に限られており、アイルランド語の‘be done’構文とは明らかに違う。フランス語では受動構文において1・2人称の動作主がほとんど現れないことから話題性の変化に伴う態の交替が見て取れるが、アイルランド語の両構文には話題性の変化が見られないため、こちらは態の交替によるものではないと結論付けられる。

本稿では、まず第1章で簡潔な文法と共にアイルランド語に関する基本情報を提示した後、第2章で受動と能格についての先行研究、およびアイルランド語の当該構文

についての先行研究を纏め、本研究で明らかにすべき問題点を洗い出す。

第3章では、調査Aの英愛対訳コーパス及び調査Bのアイランド語電子コーパスの情報と、具体的な研究方法を記す。

第4章では調査Aの結果を、(1)アイランド語の‘be done’構文に対応して現れた英語の諸構文、(2)英語の受動構文に対応して現れたアイランド語諸構文、(3)英語の完了構文に対応して現れたアイランド語諸構文、(4)その他の対応関係の順で提示し、調査Aから得られた結果と考察を記述する。

第5章では調査Bの結果を、まずは‘be done’構文の適用率に応じて、大まかに9つのグループに分けて提示し、それに関する考察をおこなう。その後いくつかの動詞については、その意味に応じて6つのグループ(飲食動詞、知覚動詞、局面動詞、移動動詞、発言動詞、思考動詞)に分け、それぞれについての考察をおこなう。それらに加えて、この調査から得られたデータにより、‘be done’構文と統語的特徴との相関関係及び文法的主語との相関関係について考える。最後に、アイランド語の当該構文と単純時制構文、並びにアイランド語の当該構文とフランス語の受動構文とを比較し、当該構文の類型論的な位置付けを探る。

そして第6章で全体の結論を述べる。